

認定 NPO 法人コクレオの森  
箕面こどもの森学園  
佐野 純

「自然と生まれる学びに寄り添う仕事」

教員という仕事は、「自分自身が学び続ける存在として学習者と関わり、自然と生まれる学びに寄り添う仕事」ではないか。だから事務作業や部活動などの業務に追われて自身が新たな学びをする時間と体力がないようでは困るし、学習指導要領に縛られて自由な学びが提供できないのも残念だ。今の社会で必要とされる学びを参考にしつつ、自分や関わる子どもたちにとって、今まさに必要な学び、今まさに楽しい学びに目を向けられる仕事であってほしい。個人の意識でそんな風に取り組むことができればよいが、やはり仕組みの改善が必要だと感じている。

小学校の低学年くらいまでは昆虫がとても好きだった。特にカマキリが大好きで、よく取りに行ったものだ。団地に住んでいた頃に階段でカミキリムシを見つけて捕まえて大事に飼っていて、虫かごから出そうとした時に飛び立っていってしまい、悲しくて涙を流したのを覚えている。あの林の方に飛んでいく後ろ姿を今でも思い浮かべることができる。

あの頃は自然と自分の興味関心に沿っていろんな経験をしてたくさん学んでいたように思う。4年生になる頃に受験のために学習塾に通い始め、そういったことはいつの間にか封印されていた。最近になって、興味関心に沿って学ぶことを大事にしている学校でスタッフ（教員）をやっていて、「自分の興味関心とは何か？」と問い直すことがあり、やっぱり自然の中にいる生き物が好きだなと改めて思い出している。

それに気付いたタイミングで、今年度からコクレオの森で新しく始めることになった「水曜クラス風」の担当をすることになった。月に2回、水曜日に兵庫県川西市の里山の方にある黒川公民館で活動をするクラスである。最寄りの駅から徒歩で30分かかかる道のりを、主に低学年の子どもたちと一緒に歩くことから始まる。道中は目的のない散歩のような時間で、その日の天候や季節に応じていろんな生き物に出会いながら歩き、1時間以上かかる日も少なくない。

「蛇がいた！」という声で振り返ると、小学生が溝の中にいる蛇を見つけていた。すぐに逃げてしまうかと思ったら、溝のコンクリートの分け目の隙間からこちらを見ている。そこからニュッと出てきて、私たちが上る坂に沿った溝の流れに逆らって上り始めた。子どもたちは大喜びで一緒にそれを追いかけてながら歓声を上げていた。その後、同じ溝の先の方にはたくさんのサワガニがいた。みんなで観察していたら、ある子が雑草を釣竿にして見事に釣り上げた。周りの子どもも真似し始めて、サワガニ釣り大会になった。更に進んだところの道端に

野イチゴがたくさんなっているのを見つけた。子どもたちが駆け寄って行って次々に摘み始め、そのまま食べたり、公民館に持っていったりした。それが現地でのゼリー作りの材料の一部になって、素敵な彩りを添えた。

そのどれもが偶然の出会いであり、予定されてもいないしプログラムの中にあるわけでもない出来事だった。そこに一緒にいた私は、一緒に発見に驚き喜び、楽しんでいただけだった。強いて言えば、ある程度は車も通るような道なので安全には常に気を配って必要に応じて声かけをしたり、さすがに時間が気になるタイミングで先に進もうと声をかけたりしたくらいである。

学びは、まず身の回りのものと自分とが関わるわくわくするような経験がベースにあるような気がする。その時はきっと言葉にもならないし、何かの概念を理解しているというようなものでもないだろう。それがベースになって、後で何かの話を聞いたり本を読んだりしてそれを言語化していく。そういう意味では、まずは豊かな経験が必要になる。

教員という仕事は、それぞれの学び手が自分自身の興味関心に目を向けて、安心してそれに沿った経験ができるような場を一緒に作ることが大切な役割の 1 つではないだろうか。それを一緒に楽しみながら、さりげなく見守り、のびのびと活動できるようにする。それが個別に最適な学びの土台になるはずである。

教員とはそもそも「教える人」という意味だと思うが、いくら教えても本人の気付きにならないければあまり意味はないと思う経験があった。

実は今年度から箕面こどもの森学園の校長になった。新しい役職に就き、今までずっとメインで担当してきた中学部を他のスタッフたちをお願いして少し関わりを薄くして、小学部の低学年・高学年クラスにも以前より関わるようになった。ところがそのタイミングで新年度が始まる直前から胃腸を悪くし、ずっとしんどさが抜けきらず、病院で胃腸薬をもらい、その後も市販薬を買い足して飲み続けたり、漢方内科にかかって身体についていろんな相談をして漢方薬を試したりしてみたが、結局 1 学期を通して体調がスッキリしないままで終わってしまった。幸いそれぞれのクラス担当スタッフの尽力もあり、学校自体は特に問題なく充実した 1 学期を送ることができたが、個人的にはもっと何かできたのではないかという思いが残った。

夏休みに入っても調子は整わず、これは色々と検査でもしなければと思い、それを決める参考にと一応サードオピニオン的に別のクリニックに行ってみた。そこでもスッキリした診断はなく「調子を崩す人も多い季節ですし…」という感じで、決め手がなかった。

そこまで行ってようやく気付いたような感覚があった。自分でも日常を振り返り、医師にも色々な話をしてアドバイスももらってきたが、調子を崩したのは「運動量が減って、筋力も落ちたからではないか」ということに。どの医師もそんなことは言ってくれなかったが、自分にとってはそれが一番大きいような気がした。

その日からよく歩き、早朝に起きて散歩やランニング、夕方に時間を見つけて筋トレを実

践し始めて、胃腸の違和感は気にならなくなった。この春からの苦しみが嘘のように気力も体力も充実しているように感じる。

他人にいくら自分を伝えても理解してもらっても、それでも全ては理解してもらえないし知ってもらえない。結局自分のことは自分が一番よく知っている（周りから見て初めてわかることも、もちろんあるのだが）。本人が気付かなければ学びにはならないし、本人が納得感を持って得た学びほど、確かなものはない。

学ぶ人の中で色々な経験や知識が独自の化学変化を起こして、ある時確かな学びとして形になる。それにはそれぞれのタイミングがある。だからそれに至るまでに他者との関わりが必要である。それも特定の人だけでなく、色々な人との関わりが。教員という仕事は、自分がその一部になることと、自分以外の他者との関わりを豊かにする環境を整えることも大切な役割になりそうである。

働き方にも色々と思うことはある。2歳の子どもがいる家でなかなか思い通りにはいかないことも多く、1学期のように体調が良くない日々もある。そんな時に組織、チームとして補い合える環境や仕組みが必要だ。1学期の箕面こどもの森学園は、それができていたように思う（苦勞をかけた人が何人もいたと思うが…）。お陰で自分が不調でも学校自体は元気だった。ただ、上手くいけば来年には2人目の我が子に出会えそうなので、その頃にどのような働き方をするのかが今からの大事な検討事項の1つである。そして自分よりも若いスタッフも増えていて、これから同じように家庭の変化を迎える人が出てくることも間違いないだろう。自分の経験を通して学びつつ、その辺りの仕組みを整えていくことがこれからの大事な仕事の1つになりそうだ。

<参考>

水曜クラス風のブログ

<https://cokreono-mori.com/blog/?cat=35>

QRコード↓

